

2023年4月5日(水)

映画に学ぶ家族愛と信頼関係

10日間余りの春休みの間に、時間をやりくりして映画を4本見ました。旅立ちと出会いの卒入学のこの季節、主人公の生徒を支える家族と同じく、愛と信頼を問う作品ばかりでした。

(A) 『エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス』

原題:Everything Everywhere All at Once

制作年:2022年/上映時間:140分/制作国:アメリカ合衆国

監督:ダニエルズ(ダニエル=クワン,ダニエル=シャイナート)

■言わずと知れた今年のアカデミー賞で作品賞など7部門に輝いた近未来を描いたSF映画。ふんだんに他作品のパロディを盛り込んだもので、多様性を持つ社会が問われる現在を揶揄しています。話は複雑で全編に広東語・中国語・英語が入り乱れる。理解はやや困難で2度も見てしまいました。全体を「家族愛」が貫いています。

(B) 『小さき麦の花』原題:隱入塵煙 (Return to Dust)

制作年:2022年/上映時間:133分/制作国:中国

監督:リー=ルイジュン

■過酷な自然の中に抗いながら、慎ましい生活を営む夫婦の話。中国を代表する女優ハイ=チンがノーメイクで障害を持った貧しい農民を体当たりで演じ、相手役の夫は監督の甥である本物の農夫だそうです。10か月に渡る撮影を通して豊かな自然が描かれています。中国では都市部に住む若年層を中心に大人気を博したそうです。

(C) 『トリとロキタ』原題:Tori et Lokita

制作年 2022年/上映時間:89分/制作国:ベルギー+フランス合作

監督:ジャン=ピエール・ダルデンヌ,リュック・ダルデンヌ

■アフリカ大陸から不法にベルギーに渡った二人。姉弟と偽り、ビザを得ようとするが叶わず、姉ロキタはドラッグの運び屋など危険な仕事で何とか生き延びようとするのですが…。"ありがちな"ストーリー展開かも知れませんが、二人に未着したカメラ手法が大きな説得力を持って訴えかけます。

(D) 『生きる』原題:Living

制作年:2022年/上映時間:103分/制作国:イギリス

監督:オリヴァー=ハーマナス

■黒澤 明監督による1952年の作品を、ノーベル文学賞作家のイシグロ=カズオさんが脚本を描いたりメイク版。というよりも舞台も時代もアレンジを変えた「新作」とも言える作品です。胃ガンを患った一介の老人の視点から描く官僚主義批判と、「いかに生きるべきか」を問う物語。前作の素晴らしさに疑いの余地はありませんが、この作品もまた、それに劣らない鋭さを与えてくれます。

校長 石飛 一吉